

心的現象から言語現象へ

河原修一
(総合文化学科)

From Mental Phenomena to Verbal Phenomena

Shuichi KAWAHARA

キーワード：心的活動 mental activity 心象 mental image 約束事の体系 coding system

一、はじめに

日本語学表現論というスタンスで、心的現象から言語現象への過程について考察する。日本語による心象表現の意味に言及する。文学、哲学、認知科学などの知見も参照する。

表現者が様々な想いを日本語で表そうとするとき、表す対象は心的現象であり、表す方法はことばである。心的現象としての様々な想いがあらわれる場としてのところとはどういうものか。心的現象の場については、身体器官としての感覚器官(受容器)によっては具体的に知覚できないが、表現者自身の心的機能によって、おぼろげながら自覚できる。

『般若心経』では、「眼耳鼻舌身意」という六根によって「色声香味触法」という六境を認識する六識があると分類する論に対して批判し、相互作用による現象と見なす。「眼界」から「身界」までを外界、「意識界」を内界として分類する論に対しても批判し、相互連関的に世界は成り立っていると見做す。「眼耳鼻舌身」という五根は五つの感覚器官、「意根」は脳に相当するが、「色境」から「触境」までの五つの環境は、感覚器官だけ

でなく、脳を含む神経系によって認識される。「法境」という存在の関係についての認識は、脳だけによるのではなく、感覚器官による知覚を情報的前提としている。精神医学の臨床例から心身の連関が指摘され、神経生理学の実験例から脳と心とことばの関係の一端が明らかにされている。哲学でも、唯物論と唯心論の対立を止揚する弁証法的な考察があり、物と心の相互連関、主体と客体の統合または融合について言及されている。科学でも、素粒子の運動における物質とエネルギーの交替や観察主体の関与が明らかにされている。

唯識説では、「眼耳鼻舌身意」の六識(「眼耳鼻舌身」の前五識と「意識」)のほかに、自己愛的生命体無意識としての「末那識」、父母未生以来の経験の累積の無意識としての「阿頼耶識」を併せて、人間の認識を八識とする。精神医学や深層心理学でいう下意識、無意識、集合的無意識に通じるところもあるが、「末那識」「阿頼耶識」はいずれも個人的無意識にも集合的無意識にも通底する。「末那識」は生命体無意識、「阿頼耶識」は生死を超えた宇宙無意識である。唯識説は、心的存在をも分類した俱舍論を含み、様々な感情に言及するが、想像力に言及しない。文学では、ポードレール

やサルトルが想像力のもつ可能性に言及する。

人智学では、直観的に、宇宙的連関のなかで進化する人間の身体を一つの場に占める四重の存在として捉える。物質体としての肉体（鉱物的段階）、生命体としての感覺体（植物的段階）、意識体としての感情体（動物的段階）、精神体としての自我体（人間的段階）が重なり合っているとすると、物と心は、連続的、発達の、段階的に捉えられ、いわば精神的なエネルギー、形態、物質が想定されている。

二、エネルギーの分岐と形態の分化

宇宙エネルギーの根源（起動力）による宇宙の（高熱を発する）爆発と膨張と拡散のなかで、冷却とともにエネルギーが分岐し、無秩序化のエネルギーと運動に逆流する秩序化のエネルギー（重力など）と運動が生じて、宇宙の形態（星など）が分化し、宇宙の物質（および無秩序化に向かう暗黒物質）が形成される。全体的な無秩序化の流れに逆流する秩序化のエネルギーがさらに分岐して、生命エネルギーとなり、生命の形態（生命体）が分化し、蛋白質などの高分子化合物（有機物）が形成される。生命エネルギーによって生命体はしばらく生命活動を続けるが、無秩序化エネルギーに呑み込まれつつ、それぞれの遺伝子によって形態を継承して、小さな逆流を繰り返して、いずれ生命体の種またはその遺伝子の絶滅によって、無秩序化エネルギーに呑み込まれる。物質の生滅（物質とエネルギーの交替）は、生命体の個体の生死や、生命体の種の盛衰に分化する。

（一）外界と身体との異和による心的現象の芽生え

生命体の形態と物質と機能は、身体を形成する。身体を取り巻く環境（外界）は、全体として無秩序化に向かう物理現象があらわれ、身体環境は、無秩序化に抗する秩序化（ホメオスタシス、生殖など）を含む生理現象があらわれ、異和が生じる。生命体は、異和に対して、順応したり、防衛したりして、生命の維持を図る。様々な外界の刺激に対する反応（順応、親和、防衛、逃避、反撥、攻撃など）は、生前からの経験（遺伝）と

生後の経験との蓄積による活動パターンをつくる。活動パターンには外面に現れるものと外面に現れないものがある。後者は、外界の物理現象と身体の生理現象との異和から生じた心的現象の芽生えである。生前からの経験は、（集合）無意識的なものである。無意識的な心的現象は、生命エネルギーの根源（生命起動力）から生じる。

（二）生命エネルギーから心的エネルギーへの分岐

刺激に対する反応は、受動的なものから能動的なものへと分化する。その生命体の種に特有な機能（器官）に応じて、刺激を取捨選択して、情報化する。情報に基づいて、外界に対して働きかける（作動する）。

重力に沿う生命体から、重力に逆らう生命体に分化する。

外皮をもつ植物は、地球から太陽に向かって直立し、光合成によって地球環境を変え、動物のために、生命エネルギー源を提供する。

脊椎動物は、重力に逆らって、水中を泳ぎ、空を飛び、地を蹴る。

人間は、重力に逆らって直立し、歩行し、手と脳の働きによって、地球環境（自然環境）の秩序化を図り、人間環境に変える。

外界に対する内的な（外面に現れない）働きかけは、心的活動である。心的現象として、無意識的なものから意識的なものが分岐してあらわれる。

外界の刺激に対する無意識的あるいは意識的な身体の諸反応（諸活動）を制御し統合する中枢器官としての脳は、身体器官でありながら心的器官となる。脊髄につながる脳幹（延髄、橋、小脳、中脳）から、大脳辺縁系（間脳、大脳基底核、大脳古皮質、大脳旧皮質）、大脳新皮質へと分岐する。脳を中心とする心的活動は、食物や異性への親和、毒物や敵や危険への回避、驚き、恐怖、闘争心から喜怒哀楽の感情、価値判断に基づく思考などに分化する。

無秩序化エネルギーに逆流する秩序化エネルギーの重力エネルギーに対する異和として、生命エネルギーは、身体エネルギーと心的エネルギーに分岐する。身体エネルギーと心的エネルギーは同根であり、心身は無意識のところまで連関する。

外界と身体との異和は、生理的には、呼吸、摂食、消化、排泄、体液の

循環と浄化、免疫、生殖、疲労、細胞の交替などによって、解消される。自己同一性を軸とした同化と異化であり、身体環境は変化しつつも一定の状態に保たれている。脳幹および自律神経系、体液ホルモン系によって、制御されている。外面に現れない心的状態としての気分は、生理的状态に基礎づけられながら、無意識的な感覚、感情、思考などの総和として、一定の状態に保たれている。外界の刺激が感覚的知覚として突出したり、身体環境が不均衡を生じたり、記憶や想像によって心的に偏りが生じたりするとき、特定の感情が警報のようにあらわれ、気分が変動し、思考を促す。思考によって、行動（環境への働きかけ）への判断（行動しない判断も含む）あるいは決断に至る。たとえば、森のなかで熊を見たときの驚きと恐怖に促されて、逃げ出すか、じつと隠れているか、状況を考えながら、判断する。夜中に極度の空腹に耐えかねて、階下の冷蔵庫を漁るか、外食に出かけるか、状況を考えながら、判断する。失恋の記憶による悲しみに促されて、詩集を開くか、一人旅に出かけるか、状況を考えながら、判断する。外界と身体との異和、身体内の異和、心のなかの異和は、心的活動および行動（行動しないことを含む）によって解消される。脳幹から大脳辺縁系、大脳新皮質に至る上行性神経路、感覚神経を経て大脳新皮質感覚野から連合野に至る神経路および神経伝達物質（神経伝達ホルモンを含む）による情報伝達、大脳辺縁系における情緒表出、生命体価値判断、短期記憶、大脳新皮質における情報の総合的判断、行動に際しての運動神経への指示などが、脳脊髄神経系によって制御されている。

身体は、秩序化（成長）から無秩序化（老化、死）に向かう。
 有性生殖（個体の交替による種の保存）によって、個体の死が明確化する。死によって生が限られ、個人は生の意味の完結を目指しつつ、愛による永続を願う。養生から不老不死に至る幻想があらわれる。

（三）心的エネルギーから精神エネルギーへの分岐

脊椎動物の心的活動は、現場（いま、ここ、これ）への対応である。人間の心的活動には、記憶や想像による現場を離れた対応も含まれる。想像力によって、いわば時空間を超えて、今ではない時間（過去、未来）、ここではない場所、これではない物、自分ではない人間を想定した心的活

動も可能となる。地球上の生命体は、三次元世界に生存しているが、人間は、時間という第四次元を内的に獲得しつつあるとも言える。

宇宙的無意識あるいは生命体無意識から動物的直感へ、さらに精神的直観あるいは洞察へと分化し、段階を高めながら展開する。生理的欲求から心理的願望へ、さらに精神的希望あるいは意志へと分化し、段階を高めながら展開する。無意識的な反射から生命体価値判断へ、さらに生死を超えた価値意識への目覚めへと分化し、段階を高めながら展開する。三つの段階は、脳における脳幹、大脳辺縁系、大脳新皮質という展開的な分岐とおおよそ対応している。脳は身体器官、心的器官でありながら、とりわけ大脳新皮質前頭前葉が精神器官となる可能性（芽生え）をもつ。

個人の生死や集団（社会）の盛衰（戦争など）に抗して、精神活動（芸術、宗教、福祉活動など）によって、愛や幸福、平和という理想を求める。個人的な利害に拘らない思いやりや感謝、陳謝などの社会的感情から、生死を超えた懺悔、自己犠牲、勇気などの精神的感情あるいは宗教的感情に至ることもある。

ことばによって、心的活動がフィードバックされ、自覚され、明確化する。心的活動が反省され、精神活動に向かう契機となる。芸術による表現や信仰による祈りも、精神活動に向かう契機となる。

三、ことばの獲得とことばの自覚

心的現象を自覚することから、心的機能あるいは心的活動を認識し、心的領域あるいは心的世界を想定することになる。

人類の歴史の初めは、心的現象の芽生えがあったとしても、無自覚だったと思われる。

集団生活で協同作業をするとき、仲間同士の意思の疎通を図るなかで、自他の違いを認め、こころの働きやこころの働く場を感じるようになったと思われる。意思疎通の方法として、ことばを獲得してからは、こころの働きについて、ことばで確認し合うことで、自覚し認識するようになったと思われる。

(一) ことばのうまれるところ

個人の感情的な体験を音声に表出するとき、声に想いが籠められる。想いは、主体の感動でもあり、対象の指示でもあり、両者は不分明であることが多い。集団生活のなかで、個人の感情的な体験が共通の感情的な体験となり、同じ音声を模倣し反復するとき、このころのなかに喚起されるものをお互いに確認し、お互いに記憶に残す。様々な記憶の集まりを網目のようなまとまり(体系)として共有し、仲間うちの約束ごとにする。或る音声か、或るものごとを表象することについて、皆のこのころのなかの結びつき(集合心理)となる。

(二) 共同体の形成と言語の発生

狩猟や農耕で相互に協力して、共同体をつくるとき、経済的共同体でもあり、精神的共同体でもある。共同体の構成員の間に、精神的な紐帯(心のつながり、連帯感)ができる。

労働し、道具で生産し、収穫する。はたらきながら、うたう(労働歌)。豊作をいのる(呪術)。神をまつる(祭儀)。まつるとき、神を喜ばせるために、おどろい、うたう(呪能)。仲間の死をかなしみ、とむらう(葬儀)。男女が出会い、うたい、よびあう(歌垣)。家族をつくり、共に労働し子育てをする。人々が楽しむために、集まってあそび、おどろい、うたう(芸能)。いずれも、ことばが関わる。

たとえば、大勢で象を狩るとき、或る人達は石と棒で打ち鳴らし、大声を上げて、象を泥沼に追い込む。或る人達は待ち伏せていて、象が泥沼でもがいて弱ったところを槍で突き刺す。ことばのやりとりがなくては、共同して狩りはできないだろうと思われる。

五万年前から三万三千年前までの長野県野尻湖畔の遺跡から、骨角器の槍や(槍の穂先に付ける)石刃とともに、ナウマン象やオオツノジカの骨が発見されている。

二万年前の北海道千歳の遺跡から細石刃が、北海道野付崎からマンモスの骨が発見されている。二万三千年前のシベリアのバイカル湖畔のマリタ遺跡から、マンモスの牙から作られた女神像が発見されている。

熊をトーテム(動物霊信仰の対象)とするアイヌ人は、イヨマンテ(熊の神送り)という呪術的な儀式を行っている。霊界から、精霊が熊の毛皮と肉をまとって現世にやってきて、人間(アイヌ)にプレゼントして、再び霊界に帰るときに、感謝の意を籠めて、まつる。

(三) 関係と言語

意識を持った人間は、関係のなかで生きる。人間の生活は、経済生活と感情生活から成る。社会生活と個人の生活に分化する。

ものとの関わりで、このころのはたらきが生じる。このころのはたらきに、感動があり、指示があり、ひとに伝える。このころのはたらきに、主体の感動ともの指示という二重性がある。自分ともの(事物)との関係、自分とひと(他者)との関係という関係の二重性がある。

このころはものを指示しながら、ものへのおもいをも感動として示す。ものへのおもいには、ものによせるおもいと、ものからひろがるおもいがある。ものとのかわりをひとつたえるとき、ひとつのかわりが生じる。

自分だけのことば(私的言語)はひとには通じないし、ことばにはならない。ことばは、自分にとってこのころのなかにあり、ほかの人にとってこのころのなかにある。

(四) 人類の進化と言語の起源

七百万年前に人類が出現したとされる。

直立二足歩行によって、視野が広がり、ものの認知が広がり、ことの認識が深まり、様々なものがわかるようになる。頭骨と脊柱が直立し、共鳴腔(口と咽喉の間)が広がり、様々な音声が出来るようになる。二百万五十年前に言語の芽生えが現れたとされる。前足が手となり、手を使うことから、模様をかき、道具を作るようになる。五万年前にパターン化した模様の組合せが現れ、五千年前に文字が出現したとされる。

ことばは内在するものであり、道具は外在するものである。

(五) 言語進化の過程

音声反応と場との直接的な結合による反応的（感染的）段階（第一段階）があり、有節音声と場のなかの指示するものや情緒との関連づけによる分節的（擬音的）段階（第二段階）があり、有節音声や身振りと指示するものとの連動による行動的（実用的）段階（第三段階）があるとされる。第三段階では、並行して、唱え言や呪い^{まじまじ}と指示するものとの神秘的な関連づけによる呪術的（儀式的）用法があり、語りや身振り^{まじまじ}と指示するものとの比喩的な関連づけによる物語的（伝承的）用法があるとされる。

さらに、有節音声や文字の連なりと意識のなかで指示するものごととの関連づけによる認知的（思想的）段階（第四段階）がある。

思考の方法としての言語である。内言（こころのなかのことば）によって考えたり、日記に書いて想いをまとめたり、友達と話し合っ^{まじまじ}て考えを広げたり、文章に書いて考えや想いを展開したり要約したりする。

(六) 発達と言語の獲得

胎生期には、人間となる可能性が遺伝子にプログラムされ、胎盤を通じて母親の血液が浸透して栄養やホルモンが伝達され、神経系を含む身体が形成される。感覚、運動、感情の芽生えがあり、母親の声に応答する。

誕生に際して、すでに母親の声を記憶していて聞き分ける。

胎生期から新生児期にかけて、脳幹、大脳辺縁系を中心に神経系が発達し、神経細胞（ニューロン）の接合部（シナプス）が形成される。

母親に対する愛着と依存が強まり、母子一体的交歓が見られる。感情は自他未分化のままである。

新生児期（生後一か月以内）には、異なる二つの聴覚刺激の区別、光刺激への明暗反応、光と音の動きへの追視、図形の弁別、においの区別などが見られる。立たせた姿勢での自動歩行が見られる。世界と関わるうとする無意識的な欲求がある。

物理音と言語音を区別し、成人の語りかけに反応し、口や舌の動きに共鳴する。母親の乳やからだのにおいを区別し、唇の吸う動きと休む動きのサイクルによって母親のあやしを求める。母子の間で目を見合わせて、自

発的に微笑する。まどろみのなかで、無意識的な身震い（抱きつく動作）や空^{まじまじ}吸い、微笑、原始反射、刺激に対する手の把握反射などが見られる。人間と関わりとうとする無意識的な意欲がある。

乳児期（生後一年以内）には、脳幹、大脳辺縁系、大脳新皮質右半球を中心に発達し、神経細胞接合部（シナプス）が増加し、神経系ネットワークが形成される。

生後一か月で物に対する誘発的微笑、生後一、二か月であいまい母音の発声（クーイング）、生後二か月で人の笑顔に対する誘発的微笑、生後三か月で咽喉の構造の変化、笑い、生後四か月で母子の間での同じ物への眼差し、物への手伸ばし、生後五、六か月で反復喃語、物への手さし、視線・表情・身振り・音声によるコミュニケーション、生後六〜八か月で体感的認知（物をつかむ、落とす、眺める、なめる）、手の動きと同期する笑いや喃語、生後八か月で物の部分から全体への類推、伝い歩き（遠近感）による物の位置の認知、生後八、九か月で音調型によるコミュニケーションの機能的分化、他者模倣（即時模倣）、生後九、十か月で物への指さし、生後十か月で母子の間での物のやりとり、生後十、十一か月で物の凝視、生後十一か月で物を指さして親の顔を見る要求、物を手にして親に示す提示、一歳近くで「ふり」をする遊び（自己模倣（延滞模倣））が見られ、言語の獲得への準備がされる。

「イナイナイバー」遊びを通じて、「もの」が時間のなかで同一ではない（出現したり消滅したりする）という「こと」を発見する。

自他の意識は未分化であるが、母親との関わりを通じて、愛着、安心、違和感、不安などの感情を自覚する。母子関係がその後の人間関係（人間に対する信頼感あるいは不信任感）のモデルとなる。母親を媒介とする様々な物や人（父親など）との関わりを通じて、関係を認識し、思考が芽生える。人（父親など）との関わりを通じて、社会的な（人間関係的な）感情が芽生える。様々な感情や思考のあらわれる場（こころ）が広がる。

幼児期には、一歳頃に喉頭の位置が下がり、共鳴腔が広がる。二〜五歳に脳梁（左右脳をつなぐ神経路の束）が形成され、左右脳が分化し始める。右脳（イメージ脳）が中心であるが、左脳（言語野を含む論理脳）も機能

し始める。

一歳頃に初語（表出に近い発話）があらわれ、一歳過ぎにイメージ（心象）が形成され、一歳三か月頃に一語文による会話（一語発話）となる。一歳六か月頃に想像力が芽生え、自他の差異を認知し、積木の見立て（象徴）や対話中の指さしが見られ、二語文による会話（二語発話）が見られる。自我が芽生え、意志が明確化する。言語の獲得に際しては、混同心性が見られる。二歳には爆発的なおしゃべり、三歳にはことばの使用の慣れ、四歳には生き生きとした言語表現や洒落が見られる。言語の使用に際しては、複合が見られる。

一、二歳にはなぐり描き、三、四歳にはイメージの線描が見られる。
三、四歳から空想によるごっこ遊びが活発になる。四、五歳には、一人遊びから集団の遊びに移行する。物や情報の交換や役割の交替という社会的なルールを身につける。

三、四歳で独言（ひとりごと）による遊び、独立した記号として文字を読むこと（たどり読み）、四、五歳で内言（こころのなかのことば）、独立した記号として文字を書くこと、五、六歳で絵本を読むこと、絵本を作ること、六、七歳で文章を綴ること、絵日記を書くことができるようになる。
七、八歳頃までに、内面と現実を区別するようになる。

歩行（一歳前後）という運動と知覚の協働によって、行動範囲が拡大し、環境（認知される世界）が広がる。母親への心理的依存が強く、たえずその存在を確認しながら、少しずつ離れては様々な物や人との関係を広げ、また戻る。自分を動く点とする様々な「もの」の動きから、「もの」と「もの」との相対的な関係を認識する。自分の動き（時間の経過）によって、「もの」が出現したり、変形したり、消滅したりすることから、「もの」が同じと見えるが同じとは限らないこと、つまり「もの」の位置・性質・数量の変化（「なる」ということ）を認識する。また、行為と結果（効果、影響）という因果関係（「する」ということ）を発見する。歩くことによって刻々と環境が変化し、対応しなければならぬ。行動するためには、決断しなければならない。意志が形成され、認識が広がり、自我が芽生える。自己の欲求が遊び仲間（他者）によって妨げられることから、自

分に心があるように他者にも心があることを識り、自他の違いを認識し、自己を認識する（自意識があらわれる）。

積木遊びやままごと遊びなどを通じて、想像力によって、象徴という心的機能を身につける。

少年期（児童期）には、左右脳が分化する。心身も外界も一体化して活動し、自分とは何かと思ひ悩むことがない。感情の発達と分化、知的好奇心の発達が見られる。活発な言語活動（日常会話）が見られるが、内言は未熟である。内言やイメージを絵日記にして記述するが、後には絵を必要としなくなる。集団生活を通じて、社会的感情が発達する。自己の欲求と他者の欲求の衝突から和解へ向かう経験によって、人間関係のルールを学ぶ。言語の使用に際しては、擬似概念も見られるが、学校教育を通じて、概念との対応を理解する。

青年期（思春期）には、左脳（論理脳）が発達し、左右脳が拮抗する。脳梁が太く、情緒（イメージ、直感）脳と論理脳の機能が交錯して混合したり統合されたりする女性脳と、脳梁が細く、情緒（イメージ、直感）脳と論理脳の機能が分離しやすい男性脳と、神経系とホルモンの分泌の違いとも相まって、性差があらわれる。自意識が発達し、心身の異和、心身と外界の異和を覚え、自分とは何か、自分はどう生きるべきかと問う。心的現象があらわれ、心的領域（心的世界）が自覚される。自意識は、他者への意識となり、自他を比較する。自我の目覚め、他者存在の認識、孤独の自覚が明確になる。自他の存在や生き方、関係を大切にし、自己実現、交友、恋愛に向かう。経済的あるいは精神的な自立に向けて、家族や社会の体制と軋轢を生じ、対立することもある。恋愛感情が生じて、精神的情操、社会的倫理感、論理的思考、情緒的感受性、性的衝動などの中で葛藤があらわれるが、性差があり、遺伝や経験、状況などに応じて、個人差がある。聞き手を含む場への配慮や対応ができるようになる。精神の目覚めによって、哲学、芸術、宗教に向かうこともある。

自らの存在の意味を問う内言によって、感情や思考を跡づける。ことばによって、こころ（心的現象、心的機能、心的活動、心的領域、心的世界）を自覚する。自我の形成と確認のために、思考の方法としての言語を使用する。読書や日記、エッセー、創作などの言語表現を通じて、自分にとっ

て固有な観念や抽象概念、精神的な直観を獲得する。一方、場に配慮した言語表現ができるようになり、社会的生存のための言語を使用することばのもつ語感(ニュアンス)や含み(暗示)などを理解するようになる。

成人期以降は、個人の資質や社会的環境に応じて、個人差が甚だしい。経験によって、感情と思考を制御する方法を身につけ、価値観に応じて、自己の特性を伸ばして社会的に生かそうと努力し、達成度について自ら納得し、衰えを識って後生に託すのが普通である。心的には、生活感情や個人的経験に基づく思考を発達させ人間関係を重んじたり、集団の活動のなかで人間心理に通達したり、男女の情の機微に通じて個人的な関係を重んじたり、個人の技能の熟達に専念したりする。日常的な人間関係や社会的感情を超えて、精神的価値を追求することもある。

成人前期(少荘期)には、自分と向き合うことに十分慣れ、社会的に経験を積み、外に向かって活動を広げようとする。

成人後期(初老期)には、若い頃とは違う自分への戸惑い、受け入れ難さから、人生における価値観の転換を図ろうとする。

老年期には、(若者達を中心とした)世界との違和感、自分の世界を否定されたような疎外感、寂寥感から、諦念に至る。

成人期以降は、場に配慮した言語表現に熟達し、社会的生存のための言語を使用することばのもつ語感(ニュアンス)や含み(暗示、婉曲、世辞、冗談、洒落、ユーモア、諧謔、皮肉、嘘)などを駆使する。精神的な象徴としての言語表現(精神の表象としての言語)を創出することもある。概括すれば、少年期(児童期)には具体的表現、青年期(思春期)には情緒的表現、論理的表現、成人期には暗示的表現、婉曲的表現、象徴的表現が見られる。

(七) ことばとは何か

ものごとに触れて、様々な想いがあらわれる。ここからここへは伝わらないから、もののかたちで示そうとする。集合的なところが、約束ごと(共通理解)に基づいて、もののかたち(人の声や模様の共通部分の組合せ)で示して、それぞれの想いをやりとりする。

ことばは、ここからからだをとおしてかたちとなって、みなのこと

でむすばれる。

ことばは、生存のために社会的必要から、人間として生きるために個人の表現の必然から、ものをうつしたりおもしろいをあらわしたりする自分だけのこのころのなかのかたち(心象)から、からだ(身体器官)をとおして(咽喉や口を使って、手を使って)おと(音声)やもよう(文字)などのかたちになって、ほかの人(仲間)のこのころのなかのかたち(心象)になって、みなのことばで(約束ごととして)むすばれる。

言語とは、人間として生存するために、個人の心象が声や模様などの節目のあるかたちになり、共同体のなかの約束事の体系によって、ほかの成員の心象に再現(再構成)され、意思の疎通がはかられるものである。

(八) ことばの伝達性と伝承性

人間は、想像力のはたらきによって、現場を離れたものごとを想起し、想像することが出来る。一定の脈絡(場、状況)のなかで、或るものごとを別のものごとと結びつける象徴という心的機能をもつ。さらに、或る集団のなかで、様々な脈絡(場、状況)を通じて、約束事によって、或るものごとを別のものごとと結びつける記号という心的機能をもつ。さらに、或る集団のなかで、様々なものごとやおもしろいを様々な別のものごとと結びつける記号体系としての言語という心的機能をもつ。

言語が記号一般と異なるところは、身体による記号が体系をなし、このころのかたちをあらわし、場との関わりのあることである。ことばは、このころのかたちのやりとりのしるしであり、あらわれである。

或る集団のなかで、ことばという記号体系を支える約束事の体系という共通理解を前提とし基盤として、場(脈絡、状況)を判断し理解することによって、相互の意思の疎通(伝達と理解)が可能になる。ことばについての約束事の理解が不十分だったり、場の判断に行き違いが生じたりするとき、相互理解には至らないで、誤解が生じる。

コミュニケーションの可能性と限界性(一致、不一致)は、同じことばだからでありながら、それぞれ違うことに由来する。それぞれの個人的、集合的な経験による認識体系、価値体系(価値観)の共通性と差異性による。

遺伝子は、個人の身体を越えて、心身の形質を伝えるものである。ことばは、個人の生命を越えて、人間としての生存の営み（文化）を伝えるものであり、いわば文化の遺伝子である。

四、主体的な心の働きから客体化という心の働きへの異化

表す人の意志があり、表される様々な感情や思考などがある。表すものも、表されるものも、心から発している。しかし、表現する時点で、心は分離している。自家撞着（自同律の矛盾）として突き放すのではなく、或る次元で自家撞着と見なされる現象が、心的現象の一端であると捉える。自意識による意識の分裂ではなく、見られる自分に対して、見る自分は、心的な意識を超越した次元の高い精神的な意識の芽生えである。

心的現象から言語現象へという過程（プロセス）を考えると、心的現象も言語現象も心から発しているが、後者は前者から分離（異化）され、主体的なものがより客体的なものへと次元を変えながら移行する。このころのかたちは、しるしとしてのもののかたちには仮託される。異なる次元への移行が、言語現象の本質の一端であると捉える。

（一）もののかたちとところのかたち

もののかたちとところのかたち（心象）とは、かたちといっても次元が異なる。

もののかたちは、五官（五つの感覚器官）と脳脊髄神経系（感覚神経と脳）によって知覚され、外界および身体は実在感を伴う。このころのかたちは脳の機能によって自覚されるが、具体的なかたちとしては知覚されない。このころというとき、心的機能、心的活動などのこのころの働きを指したり、心的領域、心的世界などのこのころの働く場（心的エネルギーの場）を指したり、心的現象というこのころの働きと働く場のあらわれを指したりする。心的エネルギーの場は、直観的な想像力によって洞察される。このころという場は、ひろがりや大きさもわからない（比喩的には「心が広い」「心が大きい」という）が、一定の範囲が感じられる。心的活動というとき、感覚、感情、思考、直観などを想定すれば、それぞれ異なる動き（比喩的に

は「激痛が走る」「喜びが溢れる」「計画を立てる」「アイデアが閃く」という）が感じられる。心的機能というとき、気分を想定すれば、高低、明暗、広がりなど（比喩的には「気分が高揚する」「気持ち明るい」「気持ちが晴れる」という）が感じられる。心的活動は動的であり、心的機能は静的である。心的機能は、心的活動の前提あるいは基礎となるこのころの働きである。このころの働きと働く場は連動していて、心的エネルギーが大きければ、このころの働きは活発となり、このころの働く場はひろがって大きく感じられる。心的エネルギーが心的現象としてあらわれる。

心的活動のうち、知覚は思考の一種とも見なされる。

感覚的知覚のうち、視覚的知覚は、このころのかたちがもののかたちに近づく。視点から外界の事物（対象）までの方向と距離によって、視角が限定され、ものの一部のかたち（輪郭、明暗、色彩、奥行き）が捉えられる。視点を動かすことによって、限定された視角によるそれぞれの部分的なかたちが残像となり、心のなかで合成されて、ものの全部のかたち（全容）が捉えられる。ものの一部から全体が類推される想像力の働きも関与している。認識の枠組としては、三次元の空間のなかに、より小さい三次元の事物があるという前提による。

聴覚的知覚は、空間のなかにある事物の発する音という波動のエネルギーのあらわれとして、全空間を伝って、一定の時間のなかで捉えられる。このころのかたちは、ものの運動や活動を示すエネルギーのあらわれとして、時間を区切る響きとなる。大きさと方向性と距離感がある。

嗅覚的知覚は、気体のなかの化学物質が身体に浸透して、その濃淡と質が、強弱というこのころのかたちとして、捉えられる。

味覚的知覚は、液体のなかの化学物質が身体に浸透して、その濃淡と質が、強弱というこのころのかたちとして、捉えられる。

触覚的知覚は、主体の動きの反作用として、もののかたちの一部である輪郭と抵抗感（剛柔の動き）がこのころのかたちとなる。

痛覚、痒覚、温覚、冷覚などによる知覚は、外界や身体の状態への反応として、このころのかたちが一定のひろがりや動きとなる。

重力感覚による知覚は、重力差として、このころのかたちが動きと重量感となる。

感覚的知覚に伴う不快は、原初的な感情である。受容器から感覚神経、大脳辺縁系から大脳新皮質の感覚野、連合野、再び大脳辺縁系に至る神経路の途上で、大脳辺縁系で分泌されるホルモンに影響される。情緒的な感慨や美意識は、大脳新皮質の機能によると思われる。

心的活動のうち、記憶（想起）や想像は、想像力の働きが関与する思考の一種で、感覚や感情とも関わる。

外界のもののかたちをベースとして、記憶や想像によって、時間を過去や未来に、空間を別の（または架空の）空間にずらしたところのかたちは、もののかたちを曖昧にしたばやけたかたちである。視覚的な心像は、空間的な輪郭である。奥行きや明暗、色、質感などは定かでない。聴覚的な心像は、時間的な輪郭である。質感は定かでない。触覚的な心象は、輪郭と質感をたどることができる。痛覚、痒覚、温覚、冷覚などによる心象は、一定のひろがり動きはあっても、輪郭はたどれない。重力感覚による心象も、動きと重量感はあるが、輪郭はたどれない。嗅覚、味覚による心象は、一定のひろがり強弱はあるが、輪郭はたどれない。

連想に伴う情緒的な感慨や美意識は、大脳新皮質の機能によると思われる。

心的活動のうち、対象的認識は、五官による感覚的知覚の統合された認知を基礎（軸）に、快不快から展開する喜怒哀楽の情動、想像力の働きによる記憶（想起）や想像（連想）に伴う情緒、思索、感慨、また知識や経験に基づく思考、さらに直観や価値意識による評価や美意識が加わって、重層的かつ総合的なところのかたちとなる。

個人的な対象的認識は観念、集合的な対象的認識は概念である。

対象が物でなく人であるとき、個人的な人間関係の記憶に伴う経験的な感情や評価的認識、社会的な関係のなかでの判断や評価、人間についての本質的認識に伴う理想（あるいは諦念）、信念などが加わって、重層的かつ総合的なところのかたちとなる。

心的活動のうち、本質的認識は、知識、経験、直観、想像力、価値意識、意志に基づく理性的あるいは悟性的な判断および精神的な情操（希望、信念など）による総合的なところのかたちとなる。

集合的な本質的認識は抽象概念、直観的な本質的認識は精神的観念（洞

察）である。

(二) ところのかたちとことばのかたち

もののかたちを契機としたところのかたちがあらわれ、各個人に共通した集合的なところのかたち（固有対象、複合、擬似概念、概念）のやりとりのしるしとしてのことばのかたちが約束される。

ことばのかたちは、音声言語であれば聴覚的な心像の組立て（時間の軸に沿った組合せ）となり、文字言語であれば視覚的な心像の組立て（線条的な組合せ）となる。心像の組立て方には約束事（ルール）があり、様々な約束事は体系（まとまりある集まり）をなす。様々な心像の組立ては、潜在的に並列的かつ直列的な（すなわち構成的な）体系をなす。並列的な潜在的体系は、無意識を含む意識のひろがりとしての連想による語彙体系である。直列的な潜在的体系は、文法体系である。並列的かつ直列的な潜在的体系として、連語体系とレトリック体系がある。

ことばは、ところのかたちのやりとりのしるしであり、あらわれであるが、やりとりしないこともある。

心像の組立てということばのかたちがころのなかにとどまっついて、やりとりされないで、自意識によって意識されるとき、あるいは無意識に自らに向かうとき、思考の方法としての内言となる。心像の組立てということばのかたちが具体化されて、身体を通して、外界に音声または文字として外化されるとき、外言となる。外言のうち、ことばの具体的なかたちがやりとりされないで、自意識によって意識されるとき、あるいは無意識に自らに向かうとき、思考の方法でもあり情緒解放の方法でもある独言となる。外言のうち、ことばの具体的なかたちがやりとりされれば、思考の方法でもあり意思の疎通の方法でもある会話または文章となる。

内言または独言では、個人的なところのかたち（観念）の自分にとつてのしるしであることもある。会話または文章（詩など）でも、個人的なところのかたち（観念）や直観的なところのかたち（精神的な観念）が、独特の連語やレトリック、精神的な象徴などによって、必ずしも一般的な意思伝達を前提としないで、表現されることもある。

(三) 言語表現の展開

人間として生存するために協同して、共同体をつくる。仲間と共に生きる仲間意識と、個人として生きる個人の意識に分岐する。

意思疎通の必要性から、ことばがつくられる。仲間にものごとやおもいを伝え、個人のおもいをあらわす。

ものごとをうつすとき、目の前のものごとをうつすだけでなく、(想像力の働きによって) 目の前にないものごとをうつす。

おもいをあらわすとき、自分のおもいをあらわすだけでなく、人へのおもいをあらわす。

或る具体的なものごとに、固有名をつける。類似する様々なものごとを(想像力の働きによって) 概念化して、ことばで示す。類似する様々なものごとのつながりかた(概念の相互関係)によって世界を認識し、記述する。情緒的に叙述し、描写する。論理的に記述し、説明する。想像力によって、目の前にないものごとを想像したり推論したりする。比喩的に、また象徴的に叙述する。価値意識(直観的認識、美意識)によって、ものごとを評価する。象徴的に叙述する。

五、おわりに

宇宙エネルギーから逆流的に分岐する生命エネルギーによって、生命体が生じる。生命エネルギーから身体エネルギーと心的エネルギーが分岐し、身体と外界との異和から心的現象が生じる。身体は秩序化(成長)から無秩序化(老化、死)へと変化し続けるのに対して、心の働きは抵抗しつつも適応する。心と身体との異和から精神現象が生じる。集団生活のなかで、人間として生存するために、集合的な心の働きを約束事の体系に基づいて、ことばのかたちに変換して、意思疎通の方法とする。感情や思考などを表す意志がある。自意識は反省的な感情や思考を含みながら、意志を中核として、自我を形成して、自己同一性、自己永続性を目指す。自我は、心の働く場を想定する。自我は、無意識と意識の心的複合体として、宇宙との異和(物体(自然物、人工物)や身体(生理的自然体)からの疎外、他我(他者の心的複合体)との異和、宇宙精神との異和)から宇宙との調和

(無秩序化と秩序化を超えた宇宙精神との調和)へと、精神の目覚めに向かう。

精神の芽生えと目覚めは、詩的(文学的)表現を含む芸術表現や、自己犠牲的な信念と勇氣に基づく福祉(救済、共生)活動や、信仰に基づく宗教活動などにあらわれる。ことばは、機能を精神的な象徴に深めて、様々なレベルで関わる。

注

- (注1) アビダルマ(阿毘達磨、阿毘曇)。対象的存在分類論。
 (注2) 『日経サイエンス』二〇〇七年五月号参照。
 (注3) 『日本人はるかな旅1』(二〇〇一) NHK出版参照。
 (注4) マリノウスキー「原始言語における意味の問題」参照。
 (注5) 一定の範囲で広がる輪郭をもつ心象。

参考文献

- 1 中村元・紀野一義『般若心経・金剛般若経』(一九六〇) 岩波文庫
- 2 太田久紀『仏教の深層心理』(一九八三) 有斐閣
- 3 サルトル『想像力の問題』平井啓之訳(一九五五) 人文書院
- 4 『ボードレル全集Ⅳ』高階秀爾ほか訳(一九六四) 人文書院
- 5 シュタイナー『アカシヤ年代記より』高橋巖訳(一九八二) 国書刊行会
- 6 宮城音弥『心とは何か』(一九八一) 岩波新書
- 7 『吉本隆明全集6』『吉本隆明全集10』(一九七二〜三) 勁草書房
- 8 小野武年ほか『認知科学6 情動』(一九九四) 岩波書店
- 9 岡本夏木『子どもとことば』(一九八二) 岩波新書
- 10 長谷川宏『高校生のための哲学入門』(二〇〇七) ちくま新書
- 11 ユング『タイプ論』林道義訳(一九八七) みすず書房

(平成二十二年十一月二十六日受理)